第４学年１組　道徳学習指導案

指導者　加藤　秀和

１　主題名　　外国の文化を理解し、尊重しよう。（内容項目：１７国際理解、国際親善）
　資料名　　『バングラデシュからの転入生』（自作資料）

２　主題について

（１）主題設定の理由

内容項目１７は「他国の人々や文化に親しみ、関心をもつこと。」である。低学年の「他国の人々や文化に親しむこと。」から発展し、高学年では「他国の人々や文化について理解し、日本人としての自覚をもって国際親善に努めること」へと発展している。中学年のこの段階において、他国の人々や他国の文化に気付き、自国の文化と他国の文化との共通点や相違点などに目を向けられるようにすることが大切である。その上で、それぞれのよさを感じ取らせることが求められる。また、他国の人々もそれぞれの文化に愛着をもって生活していることを理解させるなどして、更に他国の文化に関心や理解を深めさせ、親しませることが大切である。（「学習指導要領解説　特別の教科　道徳」より抜粋）

世界はますますグローバル化し、世界中の人々が国境をこえて、より緊密に結びついている。日本への渡航者数も増え、自分たちが住む環境において外国人を見かける機会が増えた。外国製の商品、食べ物が身の回りに溢れ、情報も国境を越えて瞬時に伝わる時代である。２０２０年にオリンピックが開催されることもあり、外国人の日本への関心はますます高まっている。また、世界を舞台に活躍する日本人の数も年々増えている。そんなグローバル社会であるからこそ、日本人としてのアイデンティティを持ち、様々な国の人々と尊重し合って生きていくことが求められる。そのためには、習慣や文化、考え方、見た目が異なった外国人と共生していけるような資質、態度を育てていくことが必要である。外国人と日本人は、育った環境が異なるのであるから、様々な面で違っていて当然である。違いを受け止め、お互いの良さを認め、共生していくためにはどうしたらよいか考え、実践する力が今後ますます必要となってくる。そのような実践力を身に付けるためには、外国の文化やその国の人々のことを正しく理解しなければならない。しかし、理解して知識を増やすことにとどまっていては、真の国際理解とは言えないだろう。理解の先にある、相手の国の文化を敬い、相手の人権を尊重する態度を身に付け、思いやりの心をもって振る舞うことができてこそ、真の国際理解といえると考える。グローバル社会で生きる資質を育てるために、外国の文化と人々を理解し、相手を思いやって行動できる実践力を培っていきたい。

この期の児童は、我が国が様々な国々と関わりをもっていることに気付くようになる。また、自分の身の回りには我が国以外の多様な文化があることやそれらの文化の特徴などについて少しずつ理解や関心が高まってくる。しかしながら、外国の文化を身近に感じたり、直接体験したりする機会が少なく、正しく理解していないことが多い段階である。また、自分たちと違うものに対して、思い込みによる偏見や偏った情報による先入観を持っている段階でもある。そこで、相手の国のことを理解し、思いやりをもって行動する態度を育てていくことが必要である。本主題では、外国人の文化の背景にあるものやその特徴を理解させることを通して、相手を正しく理解

する態度や思いやりをもって行動する実践力を育てたい。そのために、これからのグローバル社会で起こりうる場面を想定した資料を作成し、主人公の気持ちを想像させたり、そのような場面に直面した時にどう行動したらよいかを考えたりさせたりする。本主題を通して、外国人と日本人との違いを違いとして受け止め、自分と違った文化や考えを尊重する態度を育てていきたい。

なお、関連価値は、６親切、思いやり、１０相互理解、寛容１２公正、公平、社会正義である。

（３）資料について

『バングラデシュからの転入生』は、バングラデシュにおけるカレーの食べ方の違いから、文化の異なる外国人との付き合い方を考えさせるために作成した資料である。「バングラデシュから来たシャボン君」（文溪堂）を参考にして作成した。

主人公のクラスにバングラデシュからモハメド君という児童が転入してきた。当初バングラデシュ語を教わるなど、クラスメイトと仲良くしていた。しかし、最初の給食でカレーライスが出た時に、興奮のあまりバングラデシュにおける食べ方と同様に、手で食べてしまった。その行為に対して、周囲が批判したことで、それ以降、モハメド君はクラスの中で話をしなくなり、手で食べることをやめてしまった。ちょうど、バングラデシュで活動していた寺尾さんが帰国し、ゲストティーチャーとして学校に来てくれた。バングラデシュの映像を見たり、バングラデシュの米を箸で掴む体験をしたりすることで、宗教や食べ物の違いが理由で食べ方が異なることに気付く。その上で、モハメド君への理解を深めていくという資料である。

グローバル化が進み、お互いの文化や習慣を尊重することが求められている。お互いに共感できる部分が多ければ、お互いが理解し合い、問題が起きることは少ない。しかしながら、相手との違いがあり、それを受容できないときに、お互いの関係に摩擦が生じる。本資料では、カレーライスを手で食べてしまったモハメド君に対しての児童の一言が、バングラデシュからきたモハメド君の尊厳を傷つけることになった。これは、無理解が原因である。学習を通し、手食文化に対しての理解を図っていきたい。そして、主人公やモハメド君の気持ちを想像させながら、相手を思いやる心をもって行動することの大切さに気付かせていきたい。この学習を通し、お互いの違いを認め合うことにとどまらず、相手に敬意をもって接することが大切であることに気付かせたい。そして、相手の気持ちを考えながら、行動する態度を育てたい。

引用資料：『バングラデシュから来たシャボン君』（出典：文溪堂　四年生の道徳）
参考資料：『手で食べる？』（出典：福音館書店）
『バングラデシュ写真資料』（JICA 派遣者より）
『インドの大衆食堂』（YOUTUBE）

３　指導計画

≪道徳≫　１７　国際理解　国際親善
（関連項目　６親切、思いやり、１０相互理解、寛容１２公正、公平、社会正義）
主題名　外国の文化を正しく理解し、尊重しよう。
資料名　『バングラデシュからの転入生』
ねらい　手で食べる理由や特徴を知ることを通して、外国の人々やその国の文化を大切に思う気持ちを育てる。

≪道徳≫　６親切、思いやり　１７　国際理解
主題名　形のバリアフリー　心のバリアフリー
ねらい　日本とイタリアのバリアフリーの形を比較することを通し、バリアフリーについて考えを深める。自分にできることを実践する態度を育てる。

≪学活≫
単元名　パラパラした米でチャーハンを作って、食べよう。
ねらい　タイ人の先生を招いて、チャーハンの作り方を教えてもらう。タイと日本の共通点、相違点を知る。

４　研究の視点との関連

道徳的実践力を高めるための指導の工夫

○写真、映像資料の活用

「手食」の文化は、日本で生活する限り、その様子を見ることも、体験することもなかなかないことである。ゆえに、手で食べることに対して、「不思議」「行儀が悪い」「遅れている」などの誤った考えを持つ児童もいると考える。そこで、手で食べる背景に宗教や食べ物があることと、マナーがあることを正しく理解させる必要がある。そのために、次の写真や映像を活用する。

・手で食べる映像
・バナナの葉を食器に使う写真、チャイの器を毎回わる写真
・バングラデシュの米と日本の米を、箸でつまんだり、手で握ったりする映像
・手で食べるときのマナーを紹介する写真

○発問の工夫

展開の前半のねらいは、「手食の文化を理解させること」である。展開の後半のねらいは、「文化が違う相手に思いやりの心をもって接することの大切さに気付かせること」である。前半で、手食についての理解が深まれば、後半のねらいを達成できると考える。そのねらいに迫れる発問をする。

４つの発問とそのねらい

①「手食についてどう思いますか。」・・・自分たちの考えを確認し、学習に興味を持たせる。
②「なぜモハメド君は話をしなくなったのでしょう。」・・・モハメド君と手食の文化を傷つけたことを理解させる。
③「手で食べる文化を知って、「ぼく」は何を考えたでしょう。」・・・手食について正しい理解を図る。①の考えと比較し、自分の考えの変容に気付かせる。

④「給食の時間になったら、モハメド君にどのように声をかけますか。」・・・手食についての正しい理解を基に、どのように振る舞えばいいのかを考えさせ、思いやりを持って接することの大切さに気付かせる。

〇考えを深めるための工夫（聴き合い活動）

中心発問である「給食の時間になったら、モハメド君にどのように声をかけますか。」に対する考えを班の友達と聴き合う時間を設ける。相手の考えを聞き、自分の考えを深められる良い機会となる。全体の前で発表することが苦手と考える児童もいることから、自分の考えをワークシートにまとめる時間を確保し、４人ほどの少人数で話し合いをさせたい。聴き合い活動を通して、文化や考え方の違いに直面した時の振る舞い方について考えさせたい。そして、食べ方や文化が違っても同じ人間として相手を大切にしなければならないことを理解させたい。

また、お互いの意見を尊重できるように、聴き方の約束である、「いなうんそう」を意識させる。さらに、一人の意見を聴いた後に、聴いていた残りの三人が感想を伝えるようにさせる。

5　本時の展開

（1）本時のねらい

〇手で食べる理由を知ることを通して、外国の人々やその国の文化を大切に思う気持ちを育てる。

（2）本時の展開

児童の活動と内容	教師の支援・留意点（〇）、評価（◇）
1　手で食べることについて考える。 〇手で食べることについてどう思いますか。 ・不思議　・遅れている ・熱くないのかな ・行儀悪い ・うちのお母さんは手で食べているよ。	〇手食に対するイメージが持てるように、手で食べている映像を提示する。 〇学習の後半でねらいにせまることができるように、正直な意見が出るように促す。 〇学習に興味が持てるように、手食の人口の「３２億人」という数を提示する。
2　資料「バングラデシュからの転入生」を読み、手で食べることについて話し合う。 〇なぜモハメド君は話をしなくなったのでしょう。 ・自分が受け入れられていないと思ったから。 ・自分の国の食べ方をひなんされたから。 ・行儀悪いと言われたから。	〇モハメド君の心情を想像しやすいように、モハメド君の様子と行動、それに対するみんなの反応を板書で確認する。 〇モハメド君の尊厳が傷つけられたことを理解できるように、食べ方を否定されたモハメド君の気持ちを想像させる。 ◇モハメド君の心情を理解することができたか。（発言）
〇手で食べる文化を知って、「ぼく」は何を考えたでしょう。 ・手で食べる理由がちゃんとあるんだ。 ・ぼくは、手で食べることはきたないことだと思っていたけど、そんなことないんだな。 ・食べ方には日本と同じようにちゃんとマナーがあるんだ。 ・モハメド君に悪いことしたな。	〇バングラデシュの文化を理解できるように、映像や画像を活用したり、キーワードを板書したりする。 〇自分の考えが持てるように、ワークシートにメモを取らせる。 〇相手の国の文化を思いやることの大切さに気付けるように、モハメド君への態度を振り返っている児童の意見を取り上げ、紹介する。 ◇「ぼくが考えたこと」を考えることができたか。（ワークシート、発言） 〇行儀が悪いなど、偏った意見を持つ児童に対しては、手で食べる理由を再確認する。 〇意見がもてない児童や書くことを困難とする児童に対しては、板書や資料を一緒に読みながら、助言をする。

◎ぼくは、モハメド君にどのように声をかけますか。 ・もっと違うところがあったら教えて。 ・日本とは食べ方が違うんだね。日本のお米はねばねばしているから、箸で食べられるよ。今度は、スプーンを使ってみてね。 ・日本も同じように、手で食べることもあるよ。おにぎりやおまんじゅうやスイカなど。食べ物によって食べ方が変わるとは知らなかったよ。	○国や文化を越えた共存の仕方について理解できるように、文化の違う相手にどのように声をかけるべきかを考えさせる。 ○一人一人がじっくりと考えられるように、考えをワークシートに書かせる。 ○友達の意見から自分の考えを深められるように、聴き合い活動を行う。 ○相手の意見を尊重し合えるように、「いなうんそう」を意識させる。また、一人の意見に、残りの班員が感想を言うようにする。 ○考えが深まるように、全体の前で発表させる。 ○本時のねらいが達成できるように、学習の前半との心の変化があることを板書で確認し、その理由を考えさせる。 ◇手食の文化の理解を基に、相手を思いやる言葉をかけることができたか（ワークシート・発言） ○考えがもてない児童に対しては、隣の席にモハメド君がいることを想像させて書かせる。 ○聴き合い活動に参加できない児童がいた場合は、そばに寄り添い、安心させる。 ○「ごめんなさい。」など謝罪の言葉のみを書いている児童に対しては、「ごめんなさい」に続く言葉を考えさせる。
3　学習を振り返る。 ○感想を書く。 ・手で食べる方法を知りませんでした。理由が分かってよかったです。 ・日本とはちがうことがあると分かりました。もっと知りたいと思いました。 ・モハメド君みたいな人が悲しまないように、理由を知ることが大切だと思いました。	○一人ひとりがじっくりと考えられるように、考えをワークシートに書かせる。 ○食べ方や文化が違っても、同じ人間として相手を大切にしなければならないことを理解させるために、友達の意見を聞かせる。 ◇文化が違う相手に思いやりの心をもって接することの大切さに気付くことができたか。（ワークシート、発言）
4　教師の説話を聞く。 ・室内で日本人はくつを脱ぐ。イタリア人は脱がない。それぞれの文化の違う理由と、それぞれの文化の受け入れ方について。	○お互いの文化を思いやることの大切さを理解させるために、イタリアでの実体験を話す。

（ワークシート）

バングラデシュからの転入生（てんにゅうせい）

名前（　　）

☆１

☆２

☆３

バングラデシュからの転入生（てんにゅう）

四月、ぼくのクラスにバングラデシュから男子の転入生（てんにゅうせい）がやってきた。名前はモハメド君。これから三年間、日本でくらすらしい。モハメド君は、日本に来たばかりなのに、日本語を少し話すことができた。日本に住んだことのあるお父さんに習ったらしい。モハメド君は、バングラデシュで使われているベンガル語を、ぼくたちに教えてくれた。

『おはよう』は『アッサラーム　アライクム』。『ありがとう』は『ドンノバート』だよ。」

ぼくたちは、モハメド君に親しみを感じ、話しかけたり学校を案内したりした。モハメド君は、とてもうれしそうだった。ぼくたちもこれからの学校生活が楽しみになった。

最初の給食の日。モハメドくんにとっては、人生で初めての給食で、とてもめずらしそうにしていた。さらに、モハメド君が大好きな「カレー」がこん立で、待ちきれない様子だった。バングラデシュでは、カレー料理が主食なのである。

「いただきます」の号令（ごうれい）をした直後、こんなことが起きた。興奮（こうふん）したモハメド君は、カレーを手で食べ始めたのである。器のカレーをスプーンでご飯にかけ、右手でごはんとよくまぜた後、指でつまんで、口に運んだのだ。ぼくたちは、びっくりして、モハメド君をいっせいに見た。その時、モハメド君のとなりの席の男の子が、モハメド君に向かって

「行ぎ悪いなあ。やめてよ。」

と、注意をした。ぼくも同じ意見だった。モハメド君は、ベンガル語で何かを言い始めたが、すぐにだまって、悲しそうな顔で下を向いてしまった。

そのことがあってから、モハメド君は、だんだん話をしなくなった。そして、手で食べなくなった。

そんなある日の二時間目、モハメド君のこきょうであるバングラデシュで二年間仕事をしていた寺尾さんという人が学校に来てくれた。バングラデシュの写真を見せながら、いろいろなことを教えてくれた。

その中で、一番気になったのが、みんなが手で食べている映像(えいぞう)だ。あの日のモハメド君と同じだった。

寺尾さんは、クラスのみんながざわついている様子を見て、手で食べる理由を二つ教えてくれた。

「一つ目の理由は宗教(しゅうきょう)です。ヒンドゥー教やイスラム教では、『右手が一番きれいなもの』という考え方があります。食べ物は、『神様からいただいたもの』だから、一番きれいな右手で食べます。また、食器を何度もくり返し使うことはきたないことと考えています。だから、バナナの葉をお皿にしたり、飲み物の食器は使い終わったらわったりします。」

「もう一つの理由は、食べ物です。日本とバングラデシュの米をくらべてください。日本の米はねばねばしているからはしがいいのです。バングラデシュの米はパラパラしているから手がいいのです。」

ぼくは、

「手で食べることは行ぎが悪いことだと思っていました。」

と意見を言うと、寺尾さんは、

「はしで食べるときにはマナーがありますよね。同じように手で食べるときにもマナーがしっかりあります。」

といい、写真を見せながら教えてくれた。

・左手は使わない。
・指先だけで食べる。
・指はなめちゃだめ。
・ひじはあげない。
・食事の前に手をきれいに洗う。

ぼくは、寺尾さんの話を聞いて、いろいろなことを考えた。

そして、あの日のモハメド君のことを思い出した。